

老人はドミノの始まり

嵐山光三郎

テレビのドラマには朝ドラ、昼ドラ、夜の歴史ドラマといくつかありまして、ひと昔前は昼の不倫ドラマに人気がありました。お父さんが会社で働いているとき、家にいる奥さまがたは、昼の一時から始まる乱倫痴情ドラマに熱中していました。日本が高度経済成長期に入った時代でした。

いまは共働きの夫婦が多く、夫の経済力によりかからず、対等にふるまう人妻がふえました。そうになると、夫に対する不満がたまって、自分の存在に悶々と悩み、そんなことに悩む自分にいらだって不倫に走る。家庭崩壊となって、さあドラマの始まりです。

らしい娼妓もいて、さまざまなドラマがくりひろげられます。

根津遊郭は東京大学に近いので、遊び好きの教師や学生がやってきた。東大に在籍していた坪内逍遙がそのひとりで、「大八幡楼」にいた花紫という源氏名の芸伎に熱をあげてしまった。逍遙は大学在籍中から、新聞に連載記事を書くスター学生で、いささか金まわりがよかった。卒業と同時に東京専門学校（のちの早稲田大学）の教師になり、そのいっぽうでシエークスピアを翻訳した。二十六歳で近代文学の第一歩となる小説『当世書生氣質』を書き、文芸理論書『小説神髓』を発表して、一躍文壇のリーダーになりました。英語の「ノベル」を「小説」と訳したのは逍遙です。逍遙は放蕩学生で、自らを「極楽とんぼ」と呼んでいた。二十七歳になった逍遙は、周囲の反対を押しきって花紫ことせん（二十二歳）と結婚した。いまの時代は男女平等で、男に負けずに働く女性がふえました。明治の女性はしとやかで働かず、男を見張るだけです。男をメロメロにするのが人妻の腕の見せどころで、わざと自立しません。

逍遙は『早稲田文学』を創刊し、仕事と研究は順調

明治時代には、遊郭の娼妓で、文豪の妻となった先駆者がいました。意地で夫を支えた花柳界出身の人妻がけっこう多く、はなから人妻願望のない自由気ままな人妻もいました。

明治時代のB級遊郭は樋口一葉が小説『にっこり』に書いているように銘酒屋形式が多く、一見したところはお座敷クラブでした。そこにいるお姐ちゃん娼妓であるけれど、心意気があって、はすっぱな売春婦ではないのです。

金さえ出せばどんな男とでも寝る女がほとんどですが、娼妓にも見栄があるし、好みもある。一発大穴ね

に進んでいきますが、四十歳になると神経衰弱となり、不眠症に悩まされます。

妻せんの横暴にふりまわされた。多くの文学史に、「せんは内助の功をつくして、生涯最良の妻となった」と書かれています。これをまゆつばであるとしたのは松本清張です。

清張の告発的小説『文豪』によれば、「逍遙は、妻のわがままにほんろうされ、大量の睡眠薬を飲んで、消極的自殺をはかった」のです。詳しく知りたい人は小説『文豪』を読んでください。

四十四歳で健康を害し、早稲田中学校校長を辞任したが、神経衰弱は一段と深まり、睡眠薬常用者となった。養女くいの回想によれば、逍遙の死は医者も公認した自殺だったのです。娼妓あがりのせんは、一途に賢婦人となろうとして、かえって夫を苦しめました。苦界からはいあがっても、小説家の妻としてはあんまり無学なのも困るのです。

せんは、晩年に逍遙が書いた日記（せんの横暴な振舞いに関する不満）を焼却してしまった。いくら三味線がうまくても、少しぐらいい本を読まなきゃ、いい妻にはなれません。日本近代文学の祖の晩年のドラマは、